『人間喜劇』における詩人について

柳　　美希子

はじめに

バルザックの『人間喜劇』の作品には、様々な再登場人物が登場する。小説『幻滅』において、バルザックは主人公リュシアン・シャルドン（後にリュシアン・ド・リュバンプレ）を詩人として描写している。また、リュシアンは『高級娼婦の栄光と悲惨』にも登場するが、この作品においては、彼は詩人としての描写はほとんど見られない[1)]。まず、『幻滅』は、三部作に分かれている。第一部は「二人の詩人」（1837）、第二部は「パリにおける田舎の偉人」（1839）、第三部は「発明家の苦悩」（1843）である。また、この小説は1819年末から1820年代を舞台としており、バルザックはこの小説の中で、ロマン派詩人の名を挙げている。19世紀のロマン主義の大詩人、ラマルチーヌ、ユゴー、ヴィニーなどである。しかし、バルザックは1837年に発表された、『幻滅』の第一部「二人の詩人」において、リュシアンとダヴィッドが小説中で賞賛するアンドレ・シェニエの詩を引用している。それは、小説の背景である1820年頃の1819年、革命期の詩人アンドレ・シェニエの全集の初版をアンリ・ドゥ・ラトゥーシュが出版したことに関係がある[2)]。バルザックはこうした背景か

1）この指摘はピエール・シトロンによるものであり、それはリュシアンが詩人として詩『雛菊』以外を出版していないことが山崎氏によっても指摘されている。Pierre Citron, «introduction» aux *Splendeurs et Misères des courtisanes*, Garnier-Flammarion, 1968, p.27. 山崎恭宏、「詩人と牢獄 ── 『娼婦の栄光と悲惨』におけるコンシエルジュリーの空間的役割 ── 」、*Gallia Bulletin de la Société de Langue et Littérature Françaises*（43），大阪大学フランス語フランス文学会編，2003，p.34.

2）実際には、バルザックは1820年にアンリ・ドゥ・ラトゥーシュが出版した、アン

ら、小説の第一部において、ロマン主義初期のシェニエの詩を愛読する、「二人の詩人」と名づけて、リュシアンとダヴィッドを描き出した。

また、他の再登場人物で、詩人として描かれているのは、『幻滅』、『モデスト・ミニョン』、『ベアトリックス』、『二人の若妻の手記』などに登場するカナリスである。この二人の人物は『幻滅』で対峙するが、実際のところはリュシアンがこの時大詩人であるカナリスに一種の憧れを抱いている。『人間喜劇』で「詩人」として登場しているのは主にリュシアンとカナリスである。「詩的な人物」として描写されている人物はダヴィッド、『あら皮』のラファエルなどが存在するが、われわれは特にバルザックが描いた「詩人」について論じたい。

これまで、バルザックと「詩人」についての様々な研究がされてきた。大きく分けると、第一に、バルザックが小説や著作品、書簡において、「詩人」という言葉を特に好んで使用している「詩人」という言葉の重要性の研究。第二に、バルザック自身の初期の詩作品についてバルザックの詩の才能は無かったという伝記的研究[3] とバルザックと同時代の詩人たちとの実際の関係[4]、そして、第三に、詩人リュシアンに関する考察[5] である。

バルザックは小説の中で、シェニエを特に優れた詩人として、登場人物に賞賛させている。つまり、シェニエはバルザックにとって当時、非

ドレ・シェニエの第２版『ポエジー』という作品を読み、詩に魅了されていたということが校訂者ロラン・ショレによって明らかにされている。(Voir la note de Roland Chollet, Honoré de Balzac, *Études de mœurs, scènes de la vie de province (fin) : Illusions perdues*, l'édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, avec la collaboration de Roland Chollet et Rose Fortassier au tome V de *La Comédie humaine*, Paris, Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1977, p.1157.)

3) Thierry Bodin, «Balzac Poète», in *L'Année balzacienne, 1982*, Paris, Garnier Frères, p.151-166.

4) Fernand Letessier, «Balzac et Lamartine», in *L'Année balzacienne, 1982*, Paris, Garnier Frères, p.31-62.

5) 鎌田隆行、「バルザック『幻滅』の第一部について ── 主人公の提示をめぐる考察 ── 」、名古屋大学人文科学研究 26, 1997-03, p.65-76.

常に重要であった詩人であることは間違いない。それは、詩人と牢獄、シェニエの死とリュシアンのコンシュエルジュリーでの獄死の運命の類似性を示すものであることが先行研究において示されている[6]。われわれは、これらの研究を踏まえて、バルザックが愛読していた詩人アンドレ・シェニエの詩とバルザックの小説に登場する詩人との共通点の中で、シェニエの詩をより具体的に取り上げ、新たなロマン主義的テーマを見出したい。また、シェニエの詩の内容を読むにあたり、バルザックの小説の中でシェニエの詩が象徴するものがバルザックの他の作品と密接に関係しているということを導き出したい。

ところで、バルザックの時代のロマン主義の詩は理性を尊重し、形式を尊重する古典主義の詩と対立することは言うまでもない。しかし、ナポレオン１世の治世における帝国主義的詩人は、最も伝統的で凝ったレトリックと、「アンシャン・レジーム」と「戦場の栄光」というテーマを好んでいた。この時代の詩人たちは凝った文体で、厳格な、精神状態を反映しない詩を作った。こうした意味において、彼らはまだ古典主義に属していた。この帝政時代においては、ロマン派詩人はまだ若く、古典主義的詩人たちに抵抗しようとしているところだった。

その後のロマン主義の時代において、ロマン主義の芸術家たちは「生きることの絶対的な焦燥、熱狂的期待、将来への時期尚早の野心、再生された思想の一種の陶酔、帝国制の索漠とした後の魂の止まるところを知らぬ渇き」[7] を持っていた。研究の対象とする、大革命期の詩人アンドレ・シェニエ（1762–1794）は、大革命期に断頭台の露となったが、ロマン派詩人の先駆者の一人ととらえられている。シェニエの詩は生前には公開されておらず、ラトゥーシュによって1819年に死後刊行されたのであり、彼の詩はまさにロマン主義の時代に読まれた。それは、ラトゥー

6）山崎恭宏、「詩人と牢獄 ── 『娼婦の栄光と悲惨』におけるコンシエルジュリーの空間的役割 ── 」、*Gallia*（43）, 2003, p.33–40.

7）Max Milner, *Littérature française 12. Le Romantisme I 1820–1843*, Arthaud, 1973, p.46.

シュやバルザックのような芸術家たちの時代の流れに沿ったものであったと言えるだろう。

バルザックの詩人像を明らかにするために、第一に、バルザックの書簡集において、彼が考える詩や詩人像、そして、シェニエについてのバルザックの考えを明らかにする。

第二に、『幻滅』において、アンドレ・シェニエの詩と二人の詩人との関係について、アンドレ・シェニエの詩を通して『幻滅』におけるリュシアンとダヴィッドの詩人像を分析する。つまり、バルザックがなぜシェニエの特定の詩を挙げて、二人の人物にロマン主義的詩人像を与え、物語を展開したのかを考えたい。先行研究においては、小説に書かれたシェニエの三つの詩について言及されているものもあるが、詳しく書かれておらず、『幻滅』をより深く読むために、それらの詩の分析をさらに試みたい。

第三に、バルザックの小説においては、社会的に成功する詩人と脱落していく詩人が見出される。そのため、成功する詩人としてカナリスを、脱落する詩人としてリュシアンを取り上げて、バルザックが描き出した詩人像について検証する。

最後に、『人間喜劇』におけるロマン主義的詩人像とその人物描写に表れるものを考察したい。

Ⅰ．バルザックのロマン主義的詩人像

作品に入る前に、ここではバルザックにとっての「詩」の定義を明らかにする。1822年４月、バルザックはベルニー夫人への愛情について手紙に次のように書いている。「言葉を覆うような種類の詩や感情を退けておき、あなたがありのままの思考を見るのに十分お強いと思いますので、私は愛情について話しましょう。」[8] この表現において、バルザックは「詩」

8）Honoré de Balzac, *Correspondance de Balzac*, tome I, Textes réunis, classés et annotés par Roger Pierrot, Paris, Garnier Frères, 1960, p.161. 以下の引用文は拙訳。バルザ

とは感情と同質のものであり、言葉を覆うものと考えている。

また、書簡集『ハンスカ夫人への手紙』の1832年５月の手紙の中で、バルザックはハンスカ夫人へ、バルザックを含む、「おそらく天から追放」され、「散り散りになり」、「不幸に見舞われ通しの生き残りの人々」、「言葉と独特な感情を持っている人々」について書いており、その独特の感情とは、「繊細さ、魂の探求、恥じらいの気持ち、人間において最も優れた人々よりもずっと純粋で甘美で穏やかな心の優しさ」[9] であるとしている。こうした人々にとっては、「詩、音楽、宗教は彼らの三つの神聖なものであり、彼らの恵まれた愛情なのです。そして、これらの情熱の各々は、彼らの心の中に同様に強い感情を呼び起こすのです。」[10] と述べている。このようにバルザックは音楽、宗教、詩を同じ表現として扱っており、これら三つのものには共通点がある。それは、「神聖なもの」であって、「愛情」の表現であり、「強い感情を呼び起こす」のである。つまり、バルザックにとって、詩とは神聖で感情を呼び起こすものであり、繊細で純粋な人間にこそ相応しいとしていると言えるだろう。

さらに、バルザックはハンスカ夫人宛の1833年２月24日の手紙にバルザックとハンスカ夫人が愛読していたアンドレ・シェニエの詩集とバルザックの二つの小説『田舎医者』、『ルイ・ランベール』の繋がりについて述べている。

> 私に開かれているのは一つの同じ道なのです。詩、宗教、知性、この三つの偉大な原則はこれら三つの著作の中に結びつき、あなたへの巡礼は完璧なものになり、私の思想の全てがそこに融合するでしょう。そして、もしあなたがそこから汲みあげるとしたら、私の作

ック：『書簡集』、「バルザック全集」26巻、伊藤幸次、私市保彦訳、東京創元社、1976を参照した。以下、*Corr.* とする。

9）Honoré de Balzac, *Lettres à Madame Hanska 1832−1844*, au tome I, édition établie par Roger Pierrot, Robert Laffont, Paris, 1990, p.7.

10）*Ibid.*

品中には、あなたにとって汲み尽せない何かがあるでしょう[11]。

このように、バルザックにとって、ロマン派詩人シェニエの詩はバルザックの二作品、宗教を象徴する『田舎医者』、知性を象徴する『ルイ・ランベール』と同様に偉大な原則をもつものとして位置づけている。つまり、詩は宗教と知性と同じくらい汲み尽せない力が働いており、それこそが「神聖なもの」であると位置づけているとも考えられるだろう。

知性を象徴する『ルイ・ランベール』との関連として、1845年12月の医師ジョゼフ・モローへの書簡において、バルザックは詩人について次のように書いている。「私たちが思考の実験室として想像している脳髄のある一部分に執着している人々、つまり、「演繹」、「分析」という非活動的なことばかりして、ひたすら心と想像を楽しませている詩人たちは狂気になり得ます。」[12] この部分に関しては、ルイ・ランベールが思考を分析と想像にばかり集中して、狂気に陥ったことを暗示しており、小説『ルイ・ランベール』において展開された「思考の破壊力」に基づいている[13]。しかし、この詩人の狂気はリュシアンにも少しは適用されるだろう。なぜなら、リュシアンが『幻滅』の中でも、セナークルにおいて文学の研究と分析をし、心と想像を生かしたが、ジャーナリズムにおける思想の絶え間ない変化で苦しみ、ジャーナリストでも詩人としても破滅後、絶望の余り、酒場の酔っ払いが自作するような小唄を書き、歌うという狂気に陥っている姿を見ることができるからである。そのため、バルザックには、詩人たちが活動をせず、「演繹」や「分析」をし、「心と想像を楽しませて」ばかりいるという属性から、危うさを包含しており、リュシアンは批判的な視点で描かれている。とは言え、それも束の間のこ

11）*Ibid.*, p.26-27.

12）*Corr.*, t. IV, p.70.

13）バルザック：『書簡集』、「バルザック全集」26巻、伊藤幸次、私市保彦訳、東京創元社、1976、訳注 p.191.

とであり、リュシアンはルイ・ランベールのように思考を完全に破壊するまでにはならないことを付け加えておこう。

では、バルザックが小説『幻滅』において、詩と詩人についてどのように考えていたのであろうか。リュシアンは次のように言っている。

> 詩の目的は皆が見て感じることができる正確なところに思考を表すことだとすれば、詩人はあらゆる人々を満足させるために、人間の知性の段階を絶えず研究しつくさなければならないのです。つまり、最も鮮やかな色彩の下に、論理と感情という相容れない二つの力を隠さなければならないのです。一語の中に多くの思想の全てをしまい込み、一つの描写によって全ての哲学を要約しなければならないのです。要するに、それらの詩句は心の中に個人の感情によって深く掘られた田畑を探し求め、花々を開花させなければならない種子なのです。全てを表現するためには全てを感じることが必要ではないでしょうか？そして、強く感じることは苦しむことではないでしょうか？だから、詩は思想と社会の広大な領域で試みた苦しい旅の後でしか生み出されないのです[14)]。

先ほどのモロー博士宛の手紙におけるバルザックの言葉とリュシアンの言葉を比較すると、第一に、バルザックが手紙に「「演繹」、「分析」という非活動的なことばかりしている詩人たち」と批判している一方、小説では、リュシアンに詩人は「人間の知性のあらゆる段階を絶えず研究しつくさなければならない」と語らせている。このように、バルザック

---

14) Honoré de Balzac, *Études de mœurs, scènes de la vie de province (fin) : Illusions perdues*, l'édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, avec la collaboration de Roland Chollet et Rose Fortassier au tome V de *La Comédie humaine*, Paris, Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1977, p.207. 以下の引用文を *IP* とする。引用文は拙訳。また、バルザック：『幻滅　上』、バルザック全集11巻、生島遼一訳、東京創元社、1959を参照した。

は手紙では詩人を批判的に書いているのに対し、小説では詩人が広大な学問に立ち向かう姿を表している。第二に、バルザックはハンスカ夫人宛の手紙において、「詩は言葉を覆うもの」であり、「強い感情を呼び起こす」と書く一方、リュシアンは詩人がその詩の中に「論理」と「感情」を包み隠し、「一つの描写によって全ての哲学を要約」すべきであると主張している。言い換えれば、「論理」を隠しながらも「哲学」を要約する詩人像と、「演繹」と「分析」をする詩人像によって、バルザックの詩人像とリュシアンが述べる詩人像とが合致していると言えるだろう。最後に、「詩は思想と社会の広大な領域で試みた苦しい旅の後でしか生み出されない」とリュシアンが述べていることは、大革命後の政変に揉まれ、社会体制の変化とその思想の変化で苦しんだロマン派詩人のことを暗示しているだろう。

ここまで、書簡と『幻滅』におけるバルザックの詩人像を見てきたが、それは「人間の知性の段階を絶えず研究」し、「強い感情を呼び起こ」し、「思想と社会の変化における苦しみをもつ」詩人であると言えるだろう。また、詩は宗教、音楽、知性というものと同等になりうる要素をもつため、芸術と同じように「広大な領域」となるものである。しかし、詩人はこうした「広大な領域」で試みたことを詩へ反映するものだとリュシアンが言うことは矛盾しているだろう。なぜなら、彼は1822年から1830年までしか詩人の活動をせず、「田舎の偉人」というくらいの才能であり、結局、才能を示せないままに自殺してしまうからである。そこで、さらにバルザックの小説の詩人像を明らかにするために、『幻滅』における詩と詩人について見てみる。

Ⅱ.『幻滅』におけるアンドレ・シェニエの詩と二人の詩人

まず、『幻滅』におけるリュシアンと彼の友人ダヴィッドの二人の登場人物の関係について具体的に見ていこう。バルザックは彼らを『幻滅』の第一部において「二人の詩人」と名づけ、彼らを詩の才能と詩的性格を持つ人間として描いた。バルザックは次のように二人の間に異なる詩

的素質を表現している。

> そして、二人とも異なる傾向によって詩に辿り着いていた。自然科学の最も崇高な思索に進むはずだったにもかかわらず、リュシアンは熱心にも文学的栄光へと向かっていた。ダヴィッドはといえば、彼の瞑想的素質には詩の素質があったが、精密科学へと関心が傾いていた。この役割の間にあるものが精神的友愛として生じたのである[15)]。

バルザックはここで二人の人物の性格の差異を明確にしている。「リュシアンが熱心にも文学の栄光に向かっていた」のに対し、ダヴィッドには「詩の素質があるにも関わらず、精密科学への関心がある」ことを示している。つまり、『幻滅』の物語において、リュシアンが薬屋であった父の科学の研究を継ぐはずであったが、文学の栄光への虚栄心に囚われてしまう一方で、ダヴィッドはその研究と発明へと向かうことを既にここで表している。後にこの小説において、リュシアンはジャーナリストになった時、有名な文学者・詩人になることしか考えない。こうした経緯は彼の野心、熱狂的な性格、そして情熱的気質を表すものである。

そしてこの時、二人はラマルチーヌ、ユゴー、アンドレ・シェニエといった、ロマン主義時代の偉大な詩人の作品を読むことに没頭している。『幻滅』の第一部「二人の詩人」において、バルザックは、ラマルチーヌやユゴーを挙げているが、シェニエについては作品名を挙げている。小説の中で、ダヴィッドとリュシアンはアンドレ・シェニエの詩『ネール』、『病める若者』、『盲人』を愛読しており、バルザックが取り上げたこれら三つの詩の共通のテーマを見出し、これらの詩の重要性を示したい。

小説の中で、第一番目に言及されている『ネール』という詩は、愛する人を残して死にゆく一人の女性が語り手である。

15）*Ibid.*, p.142.

さまよう私の魂は木の葉を通り抜け、
風やいくつかの雲の上でそよいでいるでしょう
あなたにはその魂が降りてくるのがわかるでしょう、
あるいは海の奥からも
夢のように昇れば、空に輝き
そしていつまでもやさしく、穏やかにも悲しげな私の声は
あなたの澄んだ耳を遠ざかりつつ、そっと触れる[16)]

彼女はこの詩の最後において、自然を通して自らの魂を表現している。シェニエは革命期の詩人ではあるが、「さまよう魂」、「夢」、「自然」といったテーマをここで扱っている。つまり、これらのテーマはロマン派の時代に多用されていたのであり、こうしたテーマを早くも扱っていたシェニエはロマン主義の先駆者と言われる所以である。

また、二番目の詩の『病める若者』は死にたいと両親に告白する息子である。彼はある娘へ向けた愛情の苦しみが原因となり、強く心情を吐露している。彼の愛情が自然を通して語られていることに注目してみよう。

母よ、さようなら、ぼくは死ぬ。あなたにはもう息子はいない。
（省略）
── おお、エリュマントスの丘よ！おお、谷よ！おお、森よ！
おお、響いている風よ、木の葉を震わしていた涼気、
若い胸に感情の波を震わせ、
彼女たちの亜麻のドレスの襞を揺り動かしていた！
軽やかな美しさで、軽快な、舞踊団よ！

16）André de Chénier, «Néère», *Poésies de André Chénier*, précédées d'une notice par Henri de Latouche, Nouvelle édition, in-18, Paris, Charpentier, 1881, p.47-48. 引用文は拙訳。

（省略）
おお、神々しい顔よ！おお、祝宴よ！おお歌よ！
交錯させたステップ、花々、清らかな波紋…
どんな場所でもあらゆる自然においてこれほど美しいものはない[17]。

ここでも、「丘」、「谷」、「森」という自然を通して、亜麻のドレスを着た娘への彼の愛情と苦しみを吐露している。また、『病める若者』のように、詩人リュシアンもまた、バルジュトン夫人を熱愛し、バルジュトン夫人が自分のものになかなかならないことに苦しみ、激しく心情を吐露するところに情熱的気質を見ることができる。しかし、後に彼女の愛をなくし、コラリーという愛人も死に、愛情と詩人としての地位を喪失した結果、『幻滅』の最後で、ちょっとした水の流れにあるような「丸く広がった水溜りの一つ」[18]の中に、詩的に自殺しようとする。このように、リュシアンが愛情に突き動かされやすい人物であり、自然の中で「死」を選択することは、シェニエの『病める若者』の詩のテーマである「愛情・苦しみ・死」と類似している。これは、まさにロマン主義的詩人のイメージ「青年の愛情の強い心情吐露」、「死による苦痛の開放」を反映しているだろう。

最後に三つ目の牧歌『盲人』では、年老いた放浪の盲人が叙事詩を語っている。この盲人は三人の子供たちとその村の人々にホメロスの戦争における死と混沌の叙事詩を物語る。

というのも、放浪の歌の長い婉曲な言い回しで、
彼（盲人）はあらゆる豊穣な種を繋いでいた
火の根源、水、大地、空
ジュピターの懐へ流れ落ちた河、

17）«Le jeune Malade», *Poésies de André Chénier*, p.25-27. 引用文は拙訳。
18）*IP*, p.689.

神託、芸術、友愛の都市、
そして混沌以来、永遠に変わらぬ愛を。
（中略）
トロワ海岸で軍艦が走り回り、
その向こうに彼（ホメロス）は冥界の川への罪の海岸を開いた
半神、シャグマユリの花畑、
死者の群れ ── 孤独で苦しんでいる老人たち
両親の目前で命を奪われた若者たち、
揺りかごで生命が尽きた子供たち、
死が婚姻を断絶した処女たち[19]。

盲人は人々が苦しむこうした戦争の混沌世界を語り、詩人として自然を通して、苦しみと死を描写しているのである。また、ギリシャ神話に関連する、「ホメロス」、冥界の川である «Styx»、冥界の花である «Asphodèle» を使用していることもロマン主義時代のテーマとして包含していることを見出すことができる。また、この詩の最後では、この叙事詩を語る盲人、すなわち吟遊詩人の言葉は町の子供と人々に「予言者」であると信じさせている。それは次の節にある。「彼の厳かな姿に感動した子どもたちは、/ 喜びと尊敬の眼差しを向けて、/ 冬に丘の頂上にある雪のような / 彼の口の神の言葉へ近づくのに敬服していた。」[20] という節であり、彼の言葉は自然に喩えられると同時に、神聖なものとなり、予言的詩人として立ち現れている。

『幻滅』で取り上げられた、この三つの詩の共通テーマは「愛」あるいは「死」の苦しみのという、「強い感情」の心情吐露である。いずれの詩の語り手も自然を通して「苦しみ」を表現しており、悲観的で、絶望的

19）«L'Aveugle», *Poésies de André Chénier,* p.8–17. 引用文は拙訳。（　）は筆者による説明。

20）*Ibid.*

である。『ネール』と『病める若者』においては、深い愛情が原因で苦しみを反映し、『盲人』では、「死の苦しみ」から「神聖なもの」へとつながり、予言的詩人像が立ち現れ、バルザックが「神聖なもの」とする詩をシェニエの詩によってより強調していると言えるだろう。

では、『幻滅』において、リュシアンとダヴィッドがこれらの詩を読んだ後、シェニエの次の節を呼んだ時の反応は次のようにある。

「彼らに少しも幸がないなら、果たして地上に幸があるのか？」

彼はその本に口づけをし、二人の友人は泣いた。というのも、二人とも偶像崇拝するように恋していたからである[21)]。

この節はアンドレ・シェニエの哀歌25番である。

「彼らに少しも幸がないなら、果たして地上に幸があるのか？」
至福をもたない、何という人間なのだろうか、
われわれは人の悲しい自由をかつて讃えることがあっただろうか？
もし人が恋人たちの愛のくびきを知ったとしたら？
恋人たちの喜びは甘美になり、恋人たちは優しくなる[22)]。

シェニエのこの哀歌は「恋人たちの愛」を強く表している。バルザックが『幻滅』において、リュシアンとダヴィッドが「恋をしていた」と書くとき、小説の中で引用されていたシェニエの詩の一節の意味が鮮明になる。

それは、ダヴィッドの瞑想的素質がリュシアンの妹エーヴに向けた恋の中に表現されているのである。彼が愛の告白をする時、人間と自然と

21）*IP*, p.147.
22）*Poésies de André Chénier, op.,cit,* p.118.

のつながりについて次のように表現する。

> 「全てが心に話しかけていますね。」とダヴィッドは比喩によって恋心を打ち明けようとして答えた。「やさしい人々にとっては、変化に富む景色、大気の透明さ、大地の匂いの中に、自分の魂にある詩を見つけることに無限の喜びを感じます。自然は彼らに話しかけているのです。」[23)]

ピエール・ラフォルグはこの文章について、「この詩の自然性は我々がポエティックと呼ぶものである。」[24)] と指摘している。確かに、ダヴィッドのこの表現はこの自然性により、愛情が比喩として表れて詩となり、その様子を高めており、そのため、詩的な情景を映し出している。この自然を通した表現はダヴィッドが魂の中で詩をつくる術に秀でていることをわれわれに示している。このことは、リュシアンがそうではないことを示しているのである。つまり、リュシアンの詩の中には聖なるものと愛情が結び付けられて語られてはいるが、ダヴィッドのような自然性を見出すことはできないのであり、彼らの詩人としての差異が浮かび上がるのである。

このように、バルザックがハンスカ夫人への書簡において、「シェニエは愛の詩人で、最も偉大なフランスの詩人」[25)] であると述べているように、リュシアンとダヴィッドもまたシェニエを好み、彼らが崇拝する恋人たちのことを考えながら涙を流していた。シェニエ、リュシアン、そしてダヴィッドは愛や苦しみを語る詩人として小説の中に描かれている。つまり、リュシアンとダヴィッドは自然性においては差異が見られるが、

23）*IP*, p.212.

24）Pierre Laforgue, «Balzac, Chénier et le Romantisme en 1837, ou poésie et poétique dans *Illusions perdues*», in *Cahiers Rouchers-André Chénier*, n° 20, 2001, p.130.

25）*Lettres à Madame Hanska 1832-1844*, tome I, *op.,cit*, p.55.

自らの強い個人感情を吐露する、典型的なロマン主義的詩人像を小説の中で表しているということがシェニエの詩によってより鮮明に映し出される。すなわち、シェニエの詩によって想起される主題は「恋愛の試練、絶望の誘惑、理想における幻滅の変貌」、そして、「自然」であり、まさに1830年までの第一世代のロマン派詩人のテーマであり、バルザックはダヴィッドとリュシアンの詩人としてのこうした傾向を映し出している。

Ⅲ.『幻滅』に登場する詩人 ── 成功者と脱落者 ──

まず初めに、『幻滅』では、1822年頃、デスパール公爵夫人がパリに来たばかりのリュシアンをカナリスに紹介する。この時、リュシアンはカナリスが貴族出身で、王党派に肩入れをしていることに憧憬を抱き、カナリスのようになろうとする。カナリスは主に『幻滅』、『モデスト・ミニョン』、『ベアトリックス』等に出てくる再登場人物である。彼はリュシアンとは異なり、貴族出身で詩人としての才能を社会から認められる売れっ子の詩人である。『幻滅』での登場は以下のようなものである。

> カナリス氏はこの時代の最も有名な詩人の一人であり、その栄光の始めにあるまだ若い青年で、彼は自分の才能よりも貴族であることを一層誇りにし、ショーリュー公爵夫人への恋心を隠すためにデスパール夫人のご機嫌取りのように振舞っていた。既に気取りで汚れた魅力にも関わらず、後に政治生活の波乱に身を投じた巨大な野心があることが見抜けた。彼のほとんど甘ったるい美しさ、甘ったれた物腰は深い利己主義と、その時には曖昧な生活への絶え間ない計算を隠していた。しかし、四十を過ぎたショーリュー夫人を選んだことで、宮廷からの恩恵、サン＝ジェルマン界隈からの拍手喝采を得たが、彼を強硬な宗教詩人呼ばわりしている自由主義者たちからは罵倒された[26)]。

26）*IP*, p.277. 校訂者ロラン・ショレによると、「カナリスの人物像は外見や身分が何

カナリスは出身が貴族であり、それを一番の誇りとしている。彼は『幻滅』において、野心家であり、権謀術数に長けており、貴族の地位において最も権力が大きいデスパール夫人、ショーリュー夫人に目をかけてもらい、自らの地位と名声を得ている。しかし、リュシアンはブルジョワジーと貴族の間の子どもであり、当初は詩人として誇りと成功を夢見ている。リュシアンは『幻滅』においては、女優コラリーに、そして、『娼婦の栄光と盛衰』では、高級娼婦エステルに愛情を注ぎ、貴族の後ろ盾を得ることができず、結局、自分の詩人としての栄光をつかむことができない。つまりリュシアンには野心を煮えたぎらせることはあっても、それを実行に移す力がないのである。なぜなら、『娼婦の栄光と盛衰』において、カルロス・エレーラことヴォートランに詩人としての栄光のための術（つまり、後ろ盾である貴族女性の庇護を手に入れ、地位を確かにすることであるが）を全て任せてしまうからである。その後、ヴォートランの策略と彼の傀儡になるがままになり、詩人ではなくなり、自殺によって彼の出世の道は永遠に閉ざされてしまう。バルザックはこのように『人間喜劇』における詩人リュシアンとカナリスを真逆の性格・気質の人物として描いていると言えよう。

さらに、カナリスは『モデスト・ミニョン』においてもその人物像を見ることができる。この小説は1829年を舞台としている。

カナリスは痩せた小男で、貴族的な体つきをしていて、髪は褐色、

度か変わっている。原稿では、匿名の端役であった。A. アダムは初版では、「明らかにラマルチーヌの合成（バイロン流）、V. ユゴーの合成（尊大な自負）、ヴィニーの合成（彼自身の絶頂）である。」カナリスの名前はフュルヌ版（1843）でしか表れていない。それはここで必要となるラマルチーヌとの類似なのである。校正されたフュルヌ版では、カナリスを一層ヴィニーに近づけるが、特に卑小さと利己主義という彼の本質の、モデスト・ミニョンに登場するままの彼に近づける重要な変更の人物描写がある。」（Voir la note de Roland Chollet）*IP*, p.1218.

> 子牛のような顔をし、自尊心よりも虚栄心が強い男にあるような少し小さい頭をしている。彼は贅沢、派手なこと、壮大なことが好きである。財産は彼にとって、他の誰の場合よりも必需品である。自分が貴族であることを自分の才能と同じくらい誇りとし、現在において気取りすぎているため、先祖を亡き者にしていた。（省略）彼には人々が詩人に求めるあの東洋的な輝きの眼、物腰にもかなり大した鋭敏さがあり、響きのよい声をしている[27]。

このように、カナリスは虚栄心が強く、贅沢や派手なことを好む性格であることは、リュシアンが詩人になって人々を見返してやりたいという虚栄心、ジャーナリズムでジャーナリストや女優たちと派手な宴会を毎日のように行う様子からも読み取れ、この点では共通している。しかし、カナリスは貴族としての地位を尊重し、また財産を得るために政治的地位を確固たるものにするのに固執するところがリュシアンとは異なる。それでは、ここで、カナリスの容姿とリュシアンの容姿を比較してみよう。

> リュシアンの顔には、古代の美貌に見られる線の優雅さがあった。ギリシャ風の額と鼻、女のような柔らかな白さ、黒いと思えるほどの青い目には愛情が満ちあふれ、その白目は子どもの目と初々しさを競うものだった。（省略）神々しい甘美さが白く輝くばかりのこめかみに漂っている。たとえようのない気品がなだらかに反っていて短い顎に刻みこまれていた[28]。

27）*Études de mœurs, scènes de la vie privée* : *Modeste Mignon*, l'édition de Marcel Bouteron, au tome I de *La Comédie humaine*, Paris, Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1951, p.403. バルザック：『モデスト・ミニョン』、「バルザック全集」24巻、寺田透訳、東京創元社、1974を参照した。

28）*IP*, p.145.

このように、カナリスの外見は小さな頭に子牛のような顔であるが、鋭敏さが身体から溢れている。それに対し、リュシアンの顔は女や子どもに喩えられており、一種の弱々しさが出ている。また、カナリスが東洋的な輝きの目をしているのに対し、リュシアンはギリシャ風の目鼻立ちである。バルザックはこのように彼らの外見からも真逆の詩人像を作り出したのである。

さらに、カナリスの詩についてバルザックは以下のように描いている。

> その甘えるような、素朴な、優しさで一杯の作品、静穏で、湖水の氷のように澄みきった詩句、この優しい女のような詩は、燕尾服をきっちり着込み、外交官のような体つきで、政治的影響力を夢見て、貴族のにおいを放つほど貴族的な人間で、きざで、自惚れが強く、その野心に必要な金利収入を得るための財産を渇望しながら、月桂樹の冠と、ミルトスの冠という二重の形での成功によって既に台無しにされた小男の野心家を作者としている[29)]。

カナリスが貴族としての栄誉を「月桂樹の冠」に、詩人としての成功を「ミルトスの冠」に喩えているように、バルザックは明らかにリュシアンが成し得なかったものをこの人物に付与している。また、バルザックは彼の外見と詩を完全に対立させている。そのため、一見、優しさに溢れているように見えるカナリスの詩は、実は彼自身の外見と振る舞いに表れるような、内に秘めている外交官のような抜け目の無さと完全に乖離しており、そのために彼の人物像が際立って悪く印象付けられている。また、「女のような詩」とは、リュシアンにも向けられていると考えられるだろう。なぜなら、先ほど見たように、リュシアンは女のような容姿であると描写されているからである。つまり、バルザックは詩を女性的なものとし、リュシアンを女性的人物とすることによって、小説の

29）*Ibid.*, p.403-404.

中での「詩」そのものとして人物像を描いたのだ。そして、カナリスには女性的な容姿の描写を与えず、彼の詩のみに女性性が与えられているのである。

『幻滅』では、カナリスは貴族で詩人という地位だけに固執することなく、請願審査官となり、行政の庇護を得、将来の政治への影響力を高めようとしている。その後、『ベアトリックス』において、彼が昔の大詩人で、大臣となったことが書かれており、成功者としての地位を獲得している。他方、リュシアンは詩人の地位に固執するあまり、ジャーナリズムで自らの才能を枯渇させ、生活と才能を混ぜこぜにしてしまう。そのため、彼は詩人からも、社会からも脱落していく。こうした詩人志望の一青年として、リュシアンは描かれており、19世紀初頭の社会でロマン主義の理想、情熱にばかり傾倒し、自らの力を過大視した多くの青年たちに向けたバルザックの批判とも読み取れるだろう。

おわりに

バルザックは当時のロマン主義的風潮に賛成していなかったとされているが、彼はロマン主義を小説に描くことを選び、19世紀前半のフランス社会を鮮明に描き出している。われわれはシェニエの詩を小説中の引用からさらに深く見ることで、バルザックが描き出したフランス社会をより理解できるのではないかと考え、検証を試みた。その結果、ロマン派詩人は帝政時代にまで至る苦難の生活を通して心情を吐露する傾向があったことを見出すことができた。バルザックは書簡集において、詩は「神聖なもの」であり、「愛情」や「苦しみ」などの「強い感情を呼び起こすもの」であるとしている。また、詩人たちは「演繹」、「分析」という非活動的なことばかりし、もっぱら心と想像を楽しませており、狂気に陥る危険性があると定義づけていた。

そして、『幻滅』におけるリュシアンが述べる「詩人」とは、「強い感情を呼び起こす」、「思想と社会の変化における苦しみをもつ」詩人であると定義づけ、バルザックのロマン主義的詩人像の一つであることが読

み取れる。さらに、バルザックは『幻滅』の中でリュシアンとダヴィッドを「二人の詩人」として描くために、二人の人生と、アンドレ・シェニエの詩を結びつけた。愛の詩人であるシェニエのように、リュシアンとダヴィッドもまた小説の中で、「愛情」と「苦しみ」という強い個人感情を吐露するロマン主義的詩人像を表し、ダヴィッドはその自然性における感情を詩的に表現した。シェニエの詩においては、いつも「自然」を通した「愛情」、「死」、「苦しみ」と「神聖なもの」というロマン主義的主題を詩の中に表現している。『幻滅』におけるロマン主義的詩人像は感情と自然を融合し、愛情という強い個人感情を吐露する詩人であると言えるだろう。

また、『人間喜劇』の主要な詩人の登場人物として、カナリスとリュシアンについて検証してみると、詩人である彼らに潜むものは女性性であり、カナリスには詩の中に、リュシアンには彼自身の容姿の中に見出すことができた。そのことによって、バルザックはこの二人を成功者と脱落者の詩人として明確に区別している。このように、バルザックは登場人物に心の弱さや繊細さや女のような容姿を与えることによって、社会的に脱落していく人間と平凡に暮らしていく人物に詩的なものを与えた。そして、バルザックは成功者には大胆で、抜け目無い野心家を描いていると言え、他の登場人物だけでなく、詩人たちにおいても成功者・脱落者の人物描写を明確に対立させていると言えるだろう。

（博士課程後期課程単位修得）

参考文献

Honoré de Balzac, «Lettres sur la littérature, le théâtre et les arts», in *La Reuve parisienne*, 25 septembre 1840, *Œuvres complètes de Balzac* au tome 24, *Œuvres diverses 4*, Club de l'Honnête homme, Paris, 1956, p.82–158.

Honoré de Balzac, «XV. Aux artistes. Du passé et de l'avenir des beaux-arts (doctrine de Saint-Simon)», in *Dernier spécimen*, N° 4, 24 mars 1830,

Œuvres complètes de Balzac au tome 24, *Œuvres diverses 4*, Club de l' Honnête homme, Paris, 1956, p.575-577.

Eugène Despois, «Littérature contemporaine. ── Les poètes et le Public (Galerie des Poètes vivans)», in *Revue des deux mondes Nouvelle Série* au tome dix-huitième, dix-septième année, Annandaleon-Hudson, Paris, 1847, p.714-726.

Gilbert Malcom Fees, «Balzac and the Poets», in *The Modern Language Association of America,* Publications of Modern Language Association of America, No.4, edition by Percy Waldron Long, New York, December 1932, p.1158-1166.

E.R.クルティウス、『バルザック論』、大矢タカヤス監修、小竹澄栄訳、みすず書房、1990.